

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：日置晋平

所属：大阪府立東大阪支援学校

記録日：2018 年 2 月 15 日

キーワード： コミュニケーション 動画 OAK

【対象児の情報】

- ・ 学年 小学3年生
- ・ 障害名 重度重複障害

CHARGE 症候群痙性四肢麻痺発達遅滞

両大血管右室起始・僧房弁狭窄大動脈狭窄、肺静脈絞扼術後低酸素脳症 気管軟化症喉頭分離 未定頸左凸の側弯。股関節亜脱臼で可動域制限があり、座位姿勢は不可能。カニユーレ内・口腔内・鼻腔内吸引、胃瘻経管栄養などの医療的ケアが必要な児童である。

・ 障害と困難の内容

- ① 対象児童は自身の身体的状況から座位姿勢が取れず、ストレッチャーのようにフラットに設定された車椅子を使用している。
- ② ほとんどの姿勢が仰臥位のため視界は天井の方向にあり、学習時には前方で授業を行う教員や教材等に視線を向けることに困難さがある。
- ③ 自分で顔や左腕を動かすことがあるが、姿勢を変えることはできない。
- ④ 不快な時などに顔をしかめて左凸側に体を反らせる。
- ⑤ 話しかけられた時や自分の話題を話されている時、授業の時に前で説明している先生の方向などへ視線を向ける。そのことから担任団は、対象児童は興味ある方向に視線を向けているのではないかと考えている
- ⑥ 造形活動では素材に触れた手の方に視線を向ける。素材が変化したときには表情を変えたりするなど、感覚の変化を捉えている様子が見られる。
- ⑦ 自分の車椅子に友だちが乗ると、怒ったことがある。
- ⑧ 対象児童は自分の気持ちを不快の場合では表現することが多いが、快の表現が少なく、教員、保護者ともに、その気持ちをつかみにくい。

【活動目的】

・当初のねらいから活動のながれ

私は対象児童との関わりのなかで、対象児童が一番自由に動かせられる部位は眼球ではないかと考えている。身体状況から姿勢や動きの制限がある中で、仰臥位姿勢での生活が中心の対象児童の視界は上方向が中心であった。そのため授業などで前方が見えにくいことを支援するために前方の授業の様子を撮影し、それをタブレットでモニターできるようにしてみた。するとモニターから前方の様子を見ている確認している様子が見られるようになった。その他にも、写真をみんなで見て、盛り上がっている時に視線を向けようと身体を動かしていたり、来年度の新入生が見学のため教室に入ってきた時に、視線を向けたりすることがあるなど、興味のあるものには視線を向けているのではないかと考えるようになった。

しかし、本当に興味のあるものに視線を向けているのかは確認できていなかった。そもそも興味を持って視線を向けているのかも確認できていなかった。そのため、まずは刺激を与えて、その反応から視線を興味のある方向に向けているかを確認していくことを目標とした。

その確認ができれば、興味のあるものに視線を向けるかを確認していく中で、次の目標として対象児童が興味の持ちそうなものは何かを探っていくこととした。

- ・実施期間 2017年4月～2018年3月
- ・実施者 日置晋平 小学部3年生担任団
- ・実施者と対象児の関係 担任と児童

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

エピソードより

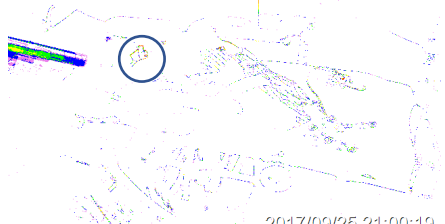
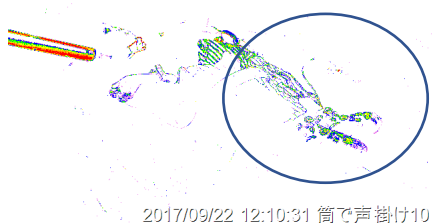
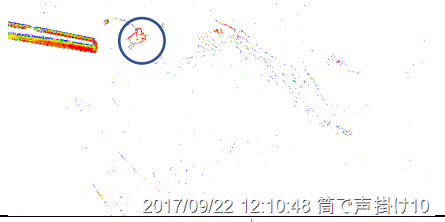
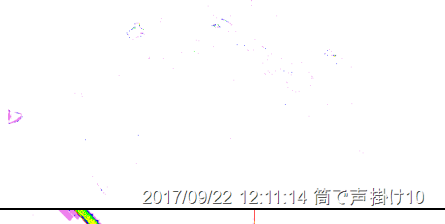
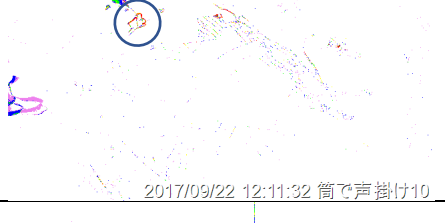
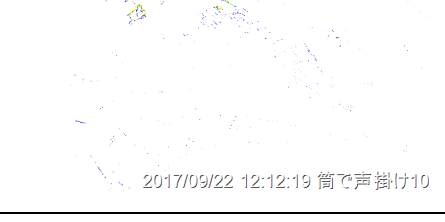
- ①写真をみんなで見て、盛り上がっている時に視線を向けようと身体を動かしていた。
- ②来年度の新入生が見学のため教室に入ってきた時に、視線を向けていた。

そもそも、ほとんどの姿勢が仰臥位姿勢であり、視界が上向きであることなどの制限がある中で、なぜ①と②のようなことがあるのか考えてみた。対象児童を3年間担任している教員に相談してみると、「気配を感じているのじゃない？」との意見があった。では「気配」とは何かと重ねて質問してみると、「対象児童は人が入って来た時の空気の違いを感じていると思う。また来年度の新入生が入って来た時、まわりの教員は緊張する。その緊張感とかも対象児童は感じ取っていると思う。」とのことであった。

では、対象児童はその「気配、空気の違い、緊張感」を何で捉えているかを探ってみることとした。

・活動の具体的内容

【活動１】耳元に筒を通して声掛けをしている様子

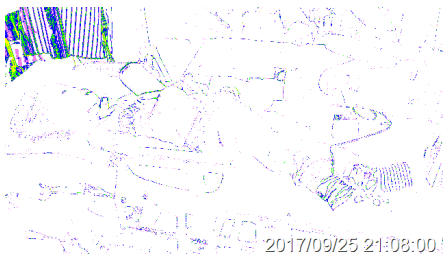
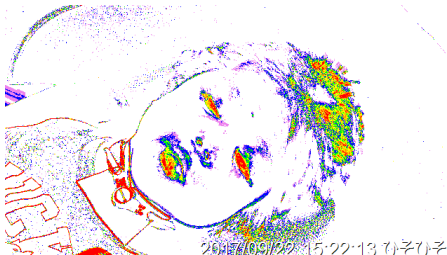
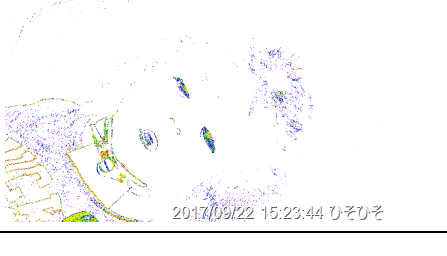
 2017/09/25 21:00:19	画像①－１ 筒で声をかける前の様子
 2017/09/22 12:10:31 筒で声掛け10	画像①－２ 右耳の横に筒を持っていき、初めて声をかけるとビクッと足が動いた。この動きは対象児童が驚いた時によく見せる動きである。
 2017/09/22 12:10:48 筒で声掛け10	画像①－３ 声をかけ続けると動きが止まっている。
 2017/09/22 12:11:14 筒で声掛け10	画像①－４ 左耳に移動する前の間。動きは見られない。
 2017/09/22 12:11:32 筒で声掛け10	画像①－５ 左耳に筒を通して話しかけている。
 2017/09/22 12:12:19 筒で声掛け10	画像①－６ 左耳から筒を離し、声掛けをやめたところ

- ・画像①－２のみ、足の動きが出現している。予想していない刺激で、驚いたのではないだろうか。
- ・画像①－３から①－６では足の動きが出現しておらず、全身の動きが小さい。周りの様子や話しかける声を聞いていたことを表している可能性がある。
- ・画像①－４と①－６のみ、喉元のカニューレ周辺の色の変化が少ない。教師の移動や、刺激に中断に反応している結果、呼吸や飲み込みのような動きの回数が少なくなっている可能性がある。

【活動2】給食時（本人は胃ろう注入時）、横で給食を、音を立てて、実況しながら食べてみた。

	画像②－1 食事を行う前の様子
	画像②－2 「今から、先生が給食をたべるよ。」と声をかけてから、食器を顔の左側に持っていくと、視線を左側に向けてきた。
	画像②－3 対象児童の右側に移動し、そこで食事をすると視線を右側に向けてきた。

少し離れたところで、他の教員と、対象児童の話をヒソヒソと話してみた。笑い声などもあったためか、この時は探索するかのように視線を色々な方向に動かしていた。

 2017/09/25 21:08:00	（画像③－1） その場面での全身の様子。全体的な動きは少なかった。
 2017/09/22 15:22:13 ひそひそ	（画像③－2） ヒソヒソ話をする前のOAKでの画像。 視線や口元、顔全体も動きは大きくないが、よく動いている。
 2017/09/22 15:23:44 ひそひそ	（画像③－3） ひそひそ話を続けていると、動きが少なくなってきた。 動画では眼球はいろいろな方向に動いていた。

【活動3】様々な飲み物や食べ物を食べて見た

食べ物の話しになると反応が大きく感じられることから、この子は食べ物に興味があるのではないかと考え、アプローチしてみた。普段は栄養剤の胃瘻注入のため、改めてアレルギー検査と経口摂取に関して、主治医に相談を行って取り組んだ。対象児童は口頭分離を行っているため誤嚥の心配は無い。しかし経口摂取の経験がほとんど無いため、飲むものに関しては保護者、担任団で相談して選定して取り組んだ。

ヨーグルトを食べてみた時の様子（1回目）



画像④-1

④-2

④-3

④-4

画像④-1 は取り組みを始める時に声かけをした場面。正面を向いている。画像④-2 でヨーグルトを顔の左側に示すと、視線をそちらに向けている。画像④-3 はヨーグルトを口に入れた所。画像④-4 はヨーグルトの味を感じて、舌を前に突き出したり口を動かしたりしている場面。あんこではここまでの動きはなかった。

都梅こんぶを食べてみた時の様子



画像⑤-1



画像⑤-2

始めは画像⑤-1 のように顔をしかめていたが、慣れると、画像⑤-2 のように、よく口を動かしている様子が見られた。

プリンを食べてみた時の様子



画像⑥-1



⑥-2



⑥-3



⑥-4



⑥-5



⑥-6

画像⑥-1 は取り組みを始める前の声かけの場面。画像⑥-2 では舌を出しているが、画像⑥-3 は舌は出していない。画像⑥-4,5 では唾液も出て、口も動いている。画像⑥-6 では「プリン、もっと食べる？」などの声かけに反応して、視線を向けていた。

あんこを食べてみている時の様子



画像⑦—1



⑦—2



⑦—3



⑦—4

画像⑥-1,2 はあんこを食べてみる取り組みを初めて、まだ回数が少ない頃である。この頃は舌を突き出すなど、反応は大きかった。しかし、回数を重ねていくと、段々と反応は弱くなってきた。画像⑥-3,4 は都梅こんぶを食べてみたのちに、あんこを食べてみた時である。始めは反応があったものの、徐々に弱まっていき、最後は口を動かさなくなった。理由は特定できないが、私たちは新鮮味が無くなり、意欲が低下したのでは？と考えている。

野菜生活シークァーサー風味と黒酢ドリンクを飲んでみての比較

野菜生活シークァーサー風味



画像⑧—1



⑧—2



⑧—3



⑧—4



⑧—5

この日は眠気が強かったようであり、始める前は眠そうだった。しかし一口、口に入れるとパッチリと目覚めた。すぐに舌を大きく突き出して、欲しそうにしている様子が見られた。

黒酢ドリンク



画像⑧—6



⑧—7



⑧—9

野菜生活シークァーサー風味をしばらく飲んだ後、次に黒酢ドリンクを飲ませて見た。すると舌の動きが少なくなり、顔をしかめることもあった。

再び野菜生活シークァーサー風味



画像⑧—10

野菜生活シークァーサー風味から黒酢、そして再び野菜生活シークァーサー風味に戻してみると、舌を出すようになった。野菜生活シークァーサー風味は酸っぱさはあるものの、甘みも強い。黒酢の方は甘みはあまり感じず、黒酢の風味が強い。あんこは酸味は無く甘いものだが、甘いだけでなく、ヨーグルトや野菜生活などの、酸味と甘みのバランスのとれたものの方が、美味しいと感じているのではないだろうか？

・対象児の事後の変化

対象児童の快の表現は保護者、教員共に確認できていなかった。不快の表現は身体を反らせて顔をしかめるなどで判断していた。そのため、不快でない＝快なのであろう、という理解しかできなかった。この取り組みの中で、身体を反らせない、視線を向けてくる等が、対象児童が意識を向けている時の反応と考えられるようになった。また食べ物での取り組みの中で、舌を突き出してくること、よく動かすことなどが、対象児童が、その時に美味しいと感じる味なのではと考えられるようになった。その動きの中でも違いがあり、対象児童にとっての表現のバリエーションを見つけることができた。対象児童が自発的に快(美味しいもの)を期待している動きも確認することができた。まだまだこの取り組みの回数は少ない。今後は回数の少ない食材も回数を重ねると反応がどう変わっていくかを探っていく。他にも様々なアプローチを試し、その反応からの表出を通して対象児童の思いを汲み取っていけるならと考える。今後は周りの人間が反応や表出への共通理解を計画し、対象児童のQOLが向上していくことを目指す。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

○対象児童が感じている気配、空気の違い、緊張感とは？

まだまだ色々な反応などを追っていく必要はあるが、今回の取り組みの中で考えられることは、対象児童が感じている気配、空気の違い、緊張感などのひとは、声や会話などの音源ではないだろうか。またその声や会話などの音源を発する者の動きではないかと私は考える。筒を通したいつもとは違う声に驚いた場面があったが、それはタイミングや、音としてとらえたことで驚いたのではないかと感じている。しかしその後続く自分への呼びかけは声という音源としてとらえているのではないだろうか。（画像①ー3より）

また給食を、音を立てて食べながら味を実況していると感じ取っている様子は、自分の近くで動きながら発する声に反応し、また話しかけられている方向を変えても視線で追ってくる様子が見られた。（画像②ー1～3）ひそひそ話に関しても、どこから聞こえてくる声、会話という音源を探索し、視線を動かしていたのではないだろうか。（画像③ー1～2）そして探索を終え、聴くことに意識が集中できたことで動きが止まったのではないかと考えられる。（画像③ー3）対象児童が視線を動かして視ようとする動きの起因のひとつは声や会話などの音源だと考えられる。

食べ物を示すと視線を向けてくることが増えた。また味によって反応が違うことが確認できた。4つの食べ物の違いから、反応のパターンの違いを見つけることができた。舌を大きく動かしたり、声かけに視線を向けたりする様子が確認できた。あんこは複数回行ったが、だんだんと反応は弱くなっていくなど、毎回同じ反応では無いことも確認できた。対象児童は不快な時、怒った時などは、身体を反らせて険しい表情をするが、この取り組みの時はその様子はほとんど見られない。対象児童にとって楽しい活動になってきたのではないかと考えられる。

飲食物での好みを探る上での留意点としては、「飽きる」という視点も考慮に入れる必要がある。今回は「甘酸っぱいものが好きなのは？」という予想ができたが、甘酸っぱいものばかりでは飽きることも考えられる。また、成長と共に好みの変化も出てくるのではないだろうか。「この子はこれが好き」という決めつけではなく、様々な飲食物、また味のものを試していく。その中で支援する側も共に楽しみながら、そして出来るなら支援者も同じものを口にするすることで、共感的な言葉かけなどを行っていくなど、この取り組み全体を通して、対象児童にとって良い時間となるように心がけていきたい。

・エビデンス

食べ物への反応の分類 ◎よく出た ○出た ×出なかった

	口を動かす	舌の突出	顔をしかめる
ヨーグルト	○	◎	×
都梅こんぶ	○	×	○
プリン	○	○	×
あんこ	○	○	×
野菜生活シークァーサー風味	○	◎	×
黒酢ドリンク	○	×	○

全ての食べ物で口を動かした。ヨーグルト、野菜生活シークァーサー風味は舌を長く突き出した。都梅こんぶ、黒酢は顔をしかめ、舌を出さなかった。舌の動きの有無や大小、顔をしかめることの有無から、反応の違いを見つけることができた。プリンやあんこなど甘いだけでなく、ヨーグルト、野菜生活シークァーサー風味などのように甘さと酸っぱさがあるなど、味が組み合わせあったものが好みなのではないかと考えられるようになった。また酸味の強いものは刺激が強すぎるのか、あまり好みではないのではないだろうか。そのことは舌の突出の大小と、顔をしかめる動きから現れている。